

The Japanese Association for Metastasis Research

NEWSLETTER Vol. 64

第34回会長挨拶／学術集会のご案内

第33回会長挨拶／学術集会を終えて

第33回 総会報告

第28回 研究奨励賞受賞報告

南條 成輝（金沢大学附属病院）

第2回女性研究者がん転移研究グラント賞受賞報告

田中 美和（がん研究会がん研究所）

寄稿 瀧口 修司 理事（名古屋市立大学）

募集案内

研究奨励賞/女性研究者がん転移研究グラント賞

役員名簿/変更届



日本がん転移学会

URL : <http://jamr.umin.ac.jp>

第34回日本がん転移学会学術集会/総会の開催にあたって

会長 山本 浩文（大阪大学大学院医学系研究科 分子病理学）

2025年6月19日（木）・20日（金）に、淡路島の淡路夢舞台国際会議場にて、第34回日本がん転移学会学術集会・総会を開催させていただきます。

今回のテーマは「がんプロフェッショナルによる転移のCureとCare」とさせていただきました。私のがん研究をはじめた30年前には、転移の克服こそががん攻略のゴールというスローガンの下、多くの研究者が、いつかがんを倒すのだという熱意をもって日々の研究を進めてゆき、分子生物学の新しい扉が次々と開かれていました。細胞周期制御機構の解明、癌遺伝子・癌抑制遺伝子の発見、エピジェネティック修飾、がんと間質反応、微小転移研究、血管新生阻害薬に始まる分子標的治療薬・抗体医薬の開発、次世代シーケンスやシングルセル解析技術の進歩、がんの免疫不活性化機構の解明、CAR-Tにみる免疫細胞加工技術の開発、放射線治療の進歩― これらが相俟って、10年単位でがんの研究成果は基礎的なメカニズム解明から臨床応用へとステップアップを遂げ、今日では臨床現場で転移を克服した患者さんをみることは珍しくなくなりました。本学術総会では、転移のCureを目指した熱意に溢れた最新の基礎・臨床研究の発表の場としたいと思います。

また、がん治療の進歩と共に転移をもちながら生活する患者さんが増加してきており、がんとの共生の在り方や社会としてどのようにCareしてゆくべきかという課題は、2023年から始まった第4期がんプロフェッショナル養成プランでも強調されているところであり、この点についてもがんプロ大阪大学拠点と連携して議論を深めたいと考えております。

淡路島は自然豊かな関西のリゾート地です。新鮮な魚介、玉葱、温泉、空と海、人形座など多くの特長を備えており、全国の皆様に知ってほしい名店も数多くございます。淡路の魅力を背景に、学術的に実り豊かな総会となるよう鋭意準備してまいります。それでは淡路の地でお会い出来る日を楽しみにしています。

会 期 : 2025年6月19日（木）～ 20日（金）
会 場 : 淡路夢舞台国際会議場
テーマ : がんプロフェッショナルによる転移のCureとCare”

<https://www.congre.co.jp/jamr2025/>

総会事務局

大阪大学大学院医学系研究科 保健学専攻 生体病態情報科学講座 分子病理学

第34回総会運営事務局

株式会社コングレ 関西MICE事業部

〒530-0005 大阪市北区中之島4-3-51

Nakanoshima Qross 未来医療R&Dセンター11階

e-mail: jamr2025@congre.co.jp

第33回日本がん転移学会学術集会・総会を終えて —がん転移学会 会員の皆様へ—

第33回日本がん転移学会会長 吉治 仁志
(奈良県立医科大学 消化器内科)

この度、第33回がん転移学会を2024年6月27日、28日に奈良市の奈良公園内に位置する若草山の麓にあるIRAKAにて開催いたしましたところ、全国から257名の会員の皆様にご参加いただき、心より御礼申し上げます。名誉会員、功労会員の先生方をはじめ、多くの皆様にご参加いただきましたこと、大変光栄に存じます。

本学会では、奈良の伝統を感じさせる能舞台を講演会場として活用し、各会場においても活発な議論が繰り広げられました。皆様の熱心なご討論とご協力により、大変有意義な時間を過ごすことができましたことを、改めて感謝申し上げます。

また、懇親会にも多くの会員にご参加いただき、賑やかに開催することができました。高速餅つきの実演や若手奨励賞の表彰など、会員間の親睦を深める素晴らしい機会となりました。

今回の学会を無事終了することができたのは、ひとえにご参加いただいた会員の皆様のおかげであり、改めて深く感謝申し上げます。これからもがん転移学会の発展に少しでも貢献できますよう努めて参りますので、引き続き教室員共々ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

末筆ながら、会員の皆様のご健康とご活躍をお祈り申し上げます。



第33回学術集会 若手奨励賞受賞者

吉治会長を囲んで

左から (PS5-1) 竹谷 皓規、(WS8-4) 坂野上 拓、(WS8-3) 山口 叶大、(WS1-5) 魚本 茜

(PS7-2) 佐々木 里歌、(P61-5) 佐久間 崇、(WS9-3) 秋末 里佳、(SY1-1) Yu Li

(敬称略)

第33回日本がん転移学会総会記録

2024年6月27日（木）評議員会（奈良春日野国際フォーラム）で下記報告事項と議案が審議され、さらに同日の総会において報告・承認された。出席者55名、委任状61名

1. 庶務報告

1) 会員状況（2024年6月20日現在）

個人会員：500名 法人会員：2社

名誉会員：19名 功労会員：32名

物故役員（顧問 3名 名誉会員10名 功労会員 8名）

※2023年9月7日に門田守人名誉会員、2024年2月16日に武藤徹一郎功労会員が
ご逝去されました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

事業報告

1) 学術集会

2023年7月20・21日仙台国際センターに於いて学術集会を開催しました。

2) 評議員会・総会

2023年7月20日の学術集会開催時、仙台国際センターに於いて評議員会の議を
経て2022年度収支決算・2023年度予算、第33回副会長山本浩文選任を審議決定し、
総会にて報告しました。

研究奨励賞を1名、女性研究者がん転移研究グラント賞を1名に授与し、受賞
講演は翌日の午前中に学術集会にて行いました。

3) 理事会を3回開催

（2023. 10. 30：WEB、2024. 4. 12：WEB 2024. 6. 26：ホテル日航奈良）

4) ニュースレターの発行

Vol. 62（2023年9月）、Vol. 63（2024年4月）

2. 2023年度収支決算および監査報告書が提出され承認された（次ページ）。

3. 2024年度予算（案）が承認された（次ページ）。

4. 次期副会長に山形大学 病理の二口 充 先生が選出された。

5. 会長選任について来年から副会長と次期副会長を選任することが承認された。

6. 2024年度役員（会長・理事・監事）が承認された（役員名簿のページ参照）。

7. 新評議員23名が承認された（役員名簿のページ参照）。

8. 研究奨励賞を1名に授与した。

南條 成輝 さん（金沢大学附属病院 呼吸器内科）

9. 女性研究者がん転移研究グラント賞を1名に授与した。

田中 美和 さん（がん研究会がん研究所 がんエピゲノムプロジェクト）

2023年度収支決算
(収入の部)

自 2023年 1月 1日 至 2023年12月31日			
科 目	予 算	決 算	差 異
年会費	(2,740,000)	(2,917,000)	(177,000)
個人会費	2,340,000	2,517,000	177,000
法人会費	400,000	400,000	0
寄附金(女性 ^g ラント賞)	# 2,500,000	2,500,000	0
雑収入	0	0	0
預金利息	(10)	(13)	(3)
普通預金	10	13	3
収 入 合 計	5,240,010	5,417,013	177,003
繰 越 金	6,936,098	6,936,098	0
総 計	12,176,108	12,353,111	177,003

#：寄附金は田中紀子功労会員から1年50万円で5年分一括納入に。
使用目的は「女性研究者が^g転移研究^gラント賞」の賞金とする。

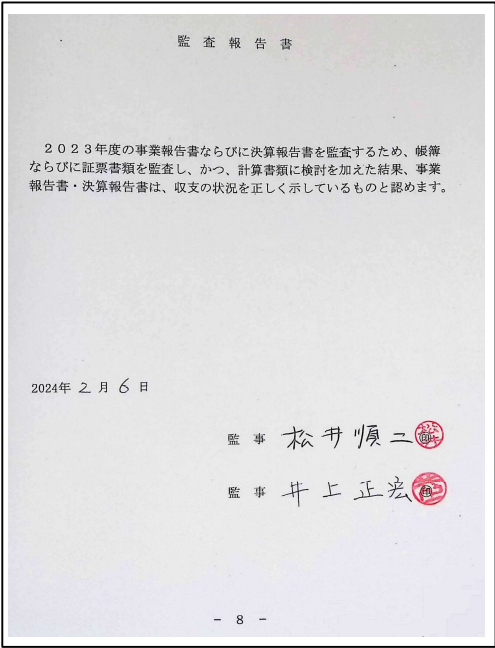
(支出の部)

自 2023年 1月 1日 至 2023年12月31日			
科 目	予 算	決 算	差 異
事業費	(2,200,000)	(2,200,000)	(0)
学会総会補助費	1,500,000	1,500,000	※ 0
研究推進活動費	0	0	0
研究奨励賞費	200,000	200,000	0
女性 ^g ラント賞	500,000	500,000	0
会議費	(0)	(0)	(0)
理事会等会議費	0	0	0
管理費	(1,905,000)	(1,952,500)	(△ 47,500)
印刷製本費	200,000	230,890	△ 30,890
通信運搬費	250,000	269,769	△ 19,769
消耗品費	20,000	13,820	6,180
給与・手当	1,350,000	1,358,969	△ 8,969
旅 費	50,000	48,520	1,480
諸 雑 費	20,000	21,732	△ 1,732
ホームページ費	15,000	8,800	6,200
予 備 費	(500,000)	(0)	(500,000)
支 出 合 計	4,620,000	4,152,500	467,500
繰 越 金		8,200,611	
総 計	12,176,108	12,353,111	177,003

※：2024年度「第33回日本がん転移学会学術集会(総会)」補助費

(財産目録)

自 2023年 1月 1日 至 2023年12月31日			
科 目	金 額		
I 資産の部			
流動資産			
普通銀行預金	1,378,573		
郵便振替口座	822,033		
郵便定額預金	6,000,000		
流動資産合計		8,200,611	
資 産 合 計			8,200,611
II 負債の部			
流動負債			
未払金	0		
流動負債合計		0	
負 債 合 計			0
正 味 財 産			8,200,611



2024年度予算

自 2024年 1月 1日 至 2024年12月31日			
科 目	収入予算	科 目	支出予算
年会費	(2,700,000)	事業費	(2,200,000)
個人会費	2,300,000	学会総会補助費	※ 1,500,000
法人会費	400,000	研究推進活動費	0
		研究奨励賞費	200,000
		女性支援 ^g ラント賞	500,000
預金利息	(10)	会議費	(0)
		理事会等会議費	0
		管理費	(1,945,000)
		印刷製本費	250,000
		通信運搬費	280,000
		消耗品費	20,000
		給与・手当	1,360,000
		旅 費	10,000
		諸 雑 費	10,000
		ホームページ費	15,000
		予 備 費	(500,000)
			500,000
収支合計	2,700,010		4,645,000
繰 越 金	8,200,611		6,255,621
総 計	10,900,621		10,900,621

※：2025年度「第34回日本がん転移学会学術集会(総会)」補助費

第28回日本がん転移学会研究奨励賞を受賞して

受賞課題：EGFR変異肺癌における空間的・遺伝子的な不均一性を踏まえた
分子標的薬治療の最適化

南條 成輝（金沢大学附属病院 呼吸器内科）

この度は、第33回日本がん転移学会学術集会・総会において、第28回日本がん転移学会研究奨励賞をいただき、大変光栄に存じます。会長の吉治仁志先生、選考委員ならび学会関係の先生方、ご推薦をいただきました矢野聖二先生に心より御礼申し上げます。この受賞のおかげさまで、会場でお会いすることができた先生方からお祝いのお言葉をいただき、中学・高校時代を過ごした奈良の地でまた新たな良い思い出ができました。また、今回これまでの受賞者の先生方のお名前を拝見する機会があり、尊敬する諸先輩方が受賞されてきたことを知り、本賞の名に恥じぬようより一層転移研究に邁進しなければいけないとも改めて身が引き締まる思いでした。

受賞対象の研究課題は、『EGFR変異肺癌における空間的・遺伝子的な不均一性を踏まえた分子標的薬治療の最適化』です。肺癌分子標的薬治療は、EGFRチロシンキナーゼ阻害薬

(EGFR-TKI) などにより20年前には考えられなかった5年生存も珍しくなくなり、その予後を改善してきました。しかしながら、このようなドライバー遺伝子変異をもつ進行期肺癌患者ですら未だに根治は限定的で、この根底には中枢神経系 (CNS) 転移を始めとする腫瘍存在部位の空間的な要素や、ドライバー遺伝子以外の併存遺伝子変異による腫瘍の不均一性があることが知られてきています。本研究では、EGFR肺癌で治療に難渋するこれらの不均一性をもつ集団を対象とし、in vitroでの検討に加えてオリジナルの髄膜癌腫症 (LMC) マウスモデルや臨床検体などを用いて薬剤耐性機構を解明し、耐性を克服して転移を制御することを目的としました。

まず、EGFR肺癌のCNS転移における空間的な不均一性への治療の最適化を目指してEGFR肺癌髄膜癌腫症マウスモデル（以下、LMCモデル）を開発しました。本モデルは、肺癌のCNS転移を機能的・分子的に理解するために非常に有用であり、まず第3世代のEGFR-TKIであるオシメルチニブが承認される前に、そのCNS転移への治療効果の高さを報告し、当該論文は薬剤添付文書にも掲載されました (Nanjo S, et al. Oncotarget. 7:3847-3856, 2016)。さらに臨床においてもオシメルチニブのCNSへの薬剤移行性の高さを脳脊髄液 (CSF) 検体で確認して、CNS転移への高い治療効果も示し (Nanjo S, et al. Br J Cancer. 118: 32-37, 2018)、これらは後には第3相試験でも同様の結果が証明されました。それでもなお、CNS転移ではそれ以外の部位に比べて薬剤耐性となることが多く、第1世代EGFR-TKIでのCNS転移に特異的な耐性メカニズムをLMCと皮下腫瘍マウスモデルと、患者さんの肺・CSF検体を用いて検討したところ、CNS外ではEGFRキナーゼドメインにおこる2次的T790M遺伝子変異が最も多いのに対し、CNS転移ではT790M変異は起こらず、Met遺伝子増幅がおこることにより側副経路が活性化することが問題となっていることを明らかにし、その耐性はMet阻害薬で克服できることを示しました

(Nanjo S, et al. Mol Cancer Ther. 16: 506-515, 2017)。さらにオシメルチニブ治療耐性後のCSFと血漿検体を次世代シーケンサー (NGS) 遺伝子パネルであるCAPP-seqで解析し、血漿で見られた耐性機序はほとんどCSFでは見出されず耐性機序の空間的な不均一性が確認された一方、CNSでの耐性機序の14%はMet遺伝子増幅で起こっていることを報告しました (Nanjo S, et al. NPJ Precis Oncol. 8:121, 2024)。

次に、ドライバー遺伝子変異に併存する遺伝子変異による不均一性について検討するため、EGFR変異肺癌診断時の検体でNGS遺伝子解析パネル検査 (Foundation One) を行った591例を

解析したところ、スプライシング因子であるRBM10の遺伝子変異がconcomitant変異として7.6%で起きていることが明らかになりました。非常に面白いことに、このRBM10遺伝子変異のほとんどがRBM10タンパクを生成しないtruncation変異であったため、RBM10野生型のEGFR変異肺癌細胞株（H3255株、PC-9株）でRBM10をknock outしたところ、EGFR-TKI（オシメルチニブ）によるアポトーシスが減弱することを明らかにした。また、逆にRBM10変異をもつEGFR変異株（A014株）ではRBM10のタンパク発現がなく、EGFR-TKIの効果が低かったため、野生型RBM10を発現させると、EGFR-TKIの効果が改善することを明らかにしました。さらにこのRBM10の遺伝子変異が併存しているEGFR変異肺がん症例では、EGFR-TKI治療に関わらず早期に転移・再発を引き起こす症例が多く、その無増悪生存期間（PFS）は5.7か月と、RBM10変異の併存がない症例の13.4か月に比べて有意に短いことを示されました。また、RBM10はアポトーシス関連遺伝子Bcl-xのスプライシングを制御しており、RBM10の欠損によりアポトーシス促進因子Bcl-xSのアポトーシス抵抗因子Bcl-xLへの比が低下することが肺がん細胞株でのRBM10ノックダウン株との比較および、公的データベースでの解析で明らかになり、RBM10遺伝子のbiologyも明らかになりました。そこで、Bcl-xL阻害薬（Navitoclax）をオシメルチニブに併用することで、RBM10変異EGFR変異肺がん細胞株（H1975株）における初期耐性を克服できることをin vitro, in vivoで示しました（Nanjo S, et al. J Clin Invest. 132: e145099, 2022）。

以上のことから、EGFR肺がんといえども均一な肺癌ではなく、血液脳関門（BBB）の影響で空間的な不均一性がCNS転移にはあり、またconcomitant遺伝子変異の有無によっても、EGFR-TKI治療後の転移・再発のしやすさが異なっており、薬剤感受性に違いが生じることを明らかにしました。これら研究において、肺がんの分子標的薬耐性の新たなメカニズムが同定されるとともに、治療法の候補が見つかったことから、将来この不均一性に基づく耐性克服を目指す臨床試験が行われ、成果が患者さんに還元されればと願っております。

私は、2007年から現在にいたるまで肺がんを中心とした患者さんを診る呼吸器内科医として働いておりますが、専攻医のときに臨床におけるunmet needsをご教示くださった神戸市立医療センター中央市民病院・先端医療センター片上信之部長（現・宝塚市立病院副院長）のご指導なければこれらの研究を始めることはなかったと考えております。また、2016年からのカリフォルニア大学サンフランシスコ校腫瘍内科留学中にTrevor Bivona教授、Ross Okimoto先生のご指導なくして基礎的な検討が深まることはなかったと感謝しております。そして何より大学院時代と2021年の金沢大学復職後に、矢野教授のご指導で基礎研究から臨床にtranslateする道をお示しいただいていることが私の研究生活にとって非常に大きいものと考えております。このように周りの皆さまのお力添え（と大仏様のご加護）無くして今回の受賞は成しえなかったことと思っておりますので、この場をお借りして心より御礼を申し上げます。

このような素晴らしい賞をいただき、私がこれからできるせめてもの恩返しは、少しでも良い転移研究を行い、大学院生の若い先生方を指導してこれからの本学会の活性化に貢献していくことだと思っております。皆さまどうぞ変わらぬご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

写真：左から

土岐祐一郎 理事長
南條成輝
田中美和
吉治仁志 第33回会長
田中紀子 功労会員
(敬称略)



第2回日本がん転移学会女性研究者がん転移研究グラント賞受賞

受賞課題：小胞輸送経路を標的としたがん微小環境形成阻害剤の開発

田中 美和（がん研究会 がん研究所 がんエピゲノムプロジェクト）

このたび第2回日本がん転移学会女性研究者がん転移研究グラント賞を頂戴し、大変光栄で身の引き締まる思いです。ありがとうございます。本賞の設立は、田中紀子功労会員からのご寄贈によるもので、女性研究者の先輩方々からバトンを渡されたと思っています。今年は評議員にも選出していただきました。この荣誉に恥じぬよう研究に精進し、末舛恵一先生が掲げた「転移を制するものは癌を制する」を胸に、基礎研究者として日本がん転移学会を盛り上げていきたいと思っています。改めまして、第33回日本がん転移学会学術集会・総会 会長の吉治仁志先生はじめ選考委員の先生、本賞にご推薦下さった二口充先生に心より感謝申し上げます。

私のがん研究は、2005年にがん研究会がん研究所の中村卓郎部長（現東京医科大学・特任教授）にポスドクとして採用されたのが始まりで、それ以来一貫して、骨軟部肉腫の発生と悪性化の分子機構の解明に取り組んでいます。中村研での最初のテーマは「ユーイング肉腫のマウスモデルを樹立すること」でした。このテーマはなかなか大きくて、細胞培養も動物実験も初心者だった私は、比較的長い間、“論文ナシ、科研費ナシ、貧乏”の暗黒期を過ごすことになります。それでもこの時期を見捨てずに支え続けて下さった中村先生には、今でもとても感謝しています。なぜこんなに苦戦をしたかという、動物モデルをつくる時は、発生起源となる細胞に原因遺伝子を時空間的に正しく誘導して、ヒトの病態を反映するモデルを作る必要があります。ところが、骨軟部肉腫の多く、特に融合遺伝子を有する肉腫に関しては、その発生起源が不明なものが多数あり、このことが動物モデル作製の際の大きな障壁となっていました。この障壁を克服する手段の一つとして、発生起源と予想される細胞を選択的に濃縮し、その細胞群に融合遺伝子を導入した後に同種マウスへ移植するGDAモデル(遺伝子改変マウス由来同種移植:GEMM-Derived Allograft)があります。起源細胞のヒントになったのは、ユーイング肉腫の融合遺伝子を構成する転写因子ERGの組織発生における時空間的な発現で、この細胞を濃縮することでGDAモデルを完成させることができました。こうして、ユーイング肉腫モデルの開発を皮切りに他の肉腫モデル作りに取り組み、CIC再構成肉腫、滑膜肉腫、胞巣状軟部肉腫、間葉性軟骨肉腫、NTRK再構成紡錘形細胞腫瘍モデルをこれまでに樹立しています。ただし、ヒトのがんとの対応づけは常に求められます。ヒトのがんにおいて同定された遺伝子変異を導入してもマウスで同じ表現型のがんを誘導できないということはしばしば経験する現象だからです。近年は、ヒトのがん組織内でみられる細胞間の「複雑性や不均一性」をがんモデルでも再現することが求められるようになり、患者さん組織由来のモデルシステム（オルガノイドや患者腫瘍組織移植モデルPDX等）が次々と開発されています。さらに、in vitroとin vivoを繋ぐorgan-on-a-chipをはじめとした生体模倣システム（MPS）も、創薬開発や基礎生物学の学術的深化を支える技術として長足の進歩を遂げています。こうした様々なモデル系を有機的に組み合わせることで、メカニズムの理解を基盤に、転移克服に向けたバイオマーカーの特定や新規治療標的の探索、候補薬の薬効評価に繋がりたいと考えています。

私が日本がん転移学会学術集会・総会に初めて参加したのは、2016年に鳥取大学の清水英治先生が大会長をされた時で、胞巣状軟部肉腫（ASPS）の発症と転移機構について発表の機会をいただきました。ASPSは主にAYA世代に発生する軟部肉腫で、腫瘍の増殖は緩やかですが、血管形成が盛んなことから全身に転移する傾向が強く、予後不良な疾患です。原因はASPSCR1::TFE3融合遺伝子で、同じ融合遺伝子が小児の腎細胞がんの原因にもなっています。私たちが樹立したASPSモデルマウスは、ヒトASPSと同様に豊富で成熟した血管網形成と胞巣状構造が観察され、肺への高頻度の転移も忠実に反映していました。転移の際には、腫瘍細胞は血管壁細胞に被われた胞巣

状構造のまま血管内を移動していて、このことが宿主免疫からの回避法である可能性が考えられました。さらに、ASPSCR1融合蛋白の造腫瘍能には、MiT/TFEファミリー分子(TFE3, TFEB, TFEC, MITF)のうち、TFE3とTFEBで共通し、MITFやTFECには存在しない機能領域が関わっていることが示唆されました。このASPS細胞は、単体としてはおとなしいのですが、血管を味方につけると一気に悪くなるのです。現在もASPSの謎の解明に取り組んでいますが、最近私たちは、ASPSCR1::TFE3融合蛋白が、血管形成を促進する遺伝子のスーパーエンハンサーに結合することを発見しました。なかでも、血管形成促進因子を運搬する細胞内輸送分子(RAB27A/SYTL2)の活性化が、ASPSにおける独特な血管構築の原因となっていることがわかりました。がん細胞が自身の生存と増殖に適したがん微小環境を形成するにあたって、膜蛋白やサイトカインといったシグナル分子の膜輸送の効率化が重要なことは知られています。現在、活性化RAB27Aとその共役因子SYTL2との結合を狙った阻害剤の開発と、RAB27Aを中心とした小胞輸送を介したがん微小環境の形成機構の解析を進めています。さらに融合遺伝子自体やその標的の発現を制御すべく、腫瘍特異的なエンハンサーを狙ったエピゲノム編集技術の開発も目指しています。

がん転移の研究には、がん細胞自身に備わる性質も重要ですが、周囲の環境との相互作用の解析も不可欠です。貴重な生命体を用いて研究を行うことを念頭において、転移研究をまたさらに魅力的なものにするよう、そしてその魅力が若手研究者にも伝わるよう、日々研鑽を積んで参ります。今後とも会員の先生方のご指導とご鞭撻を賜れましたら幸いに存じます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

寄稿：外科医と転移制御のこれから

理事 瀧口 修司（名古屋市立大学 消化器外科）

私は、1991年大阪大学を卒業しまして、大阪大学第二外科に入局いたしました。前期研修の病院は大阪通信病院で、そこで初めて主治医としてがん治療にはじめて携わる機会をいただきました。そこで、忘れることのできない症例に出会いました。私自ら、執刀させていただいた症例で、フォローアップの中で、肝転移が判明しました。当時の胃癌肝転移の認識は、抗がん剤も効かない上に、切除しても再発することがほとんどでした。当初単発でしたので、手術を提案し、承諾の上切除することとなりました。その後、取り切れない可能性が高いことは説明しましたが、そこから4回ほど肝転移の手術を行いました。今でも、手術を受けていただいたことは、予後の延長につながったと信じております。その中で、外科医として、患者さんの期待と信頼を背負いながら、治療手段の限界を感じた症例でした。その後、大阪大学に帰学した私は、手術の負担を軽減する内視鏡手術に興味をもち、腹腔鏡胃癌手術の黎明期に技術開発をする機会に出会いました。外科手術における疼痛というハードルを下げることは、患者さんにとって治療の選択枝を増やすことにつながります。がんに対する内視鏡手術は、当時の日本では、信頼性の面で様々な意見があり、急速な普及とは程遠く、臨床試験を行い、安全性、予後などしっかり担保しつつ、徐々に広がりました。この理由の大きな要因は、その技術そのものの難しさにありました。2000年代、多くの病院に指導に呼んでいただき、この手術の普及に尽力してきましたが、すべての外科医が本当にこの手術を安全に実施することができるのかという疑問は深まるばかりでした。2010年代になり、ロボットの普及が始まり、不慣れな中、始めたロボット胃切除でした。経験とともに、

これなら、若い先生に胃切除を任せられることができる！との思いに変わりました。現在、我々の医局では、あらゆるがん手術は、ロボットで行われるようになり、レジデントの先生も初めての胃切除は、ロボットではじめている時代となりました。

初期研修時代から30年、化学療法、免疫治療がある程度確立し、転移制御が近年飛躍的に向上しました。免疫治療では効果の持続性やCRなども目の当たりにすることも珍しくなく、外科医には、仕事がなくなる心配もでてきました。開腹手術はロボット手術へと変わり、技術も飛躍的に進歩し、最小限の負担で、体の深部の病巣切除が可能となってきました。外科治療は、局所コントロールにおいて優れていると信じております。PET CTなど診断精度の向上も相まって、把握できる病巣も的確となりました。どちらが優れているという議論ではなく、手術と化学療法の組み合わせを期待しています。微小転移を得意とする抗がん剤は最小限にすることで患者負担を大きく軽減させることが可能となります。治療モダリティの組み合わせは、まだまだこれから研究に資するものと期待しております。主役がそろい始めた転移制御はこれからさらに本格的になるものと期待されます。多くの患者さんの期待に応えるため、転移制御を通して本学会の使命が果たせられる時代へ今後も邁進あるのみと思います。私を信じて、がんと闘っていただいた多くの患者さんにいい時代になったとお伝えできるのはそれほど遠くないと思っています。



新評議員の申請案内

評議員の任期は3年ですが、第32回理事会・評議員会で随時評議員に選任できることが承認されましたのでお知らせします。

個人評議員の選出条件

1) 原則として3年以上本会会員であり、会費を完納していること。

2) 本会や関連学会、学術雑誌などですぐれた評価を受けていること。

*筆頭あるいは共著の発表を、3回の総会で少なくとも1回行うことを原則とする。

*役員の任期は65歳になる年の12月末で終了する。

★ 評議員の年会費は10,000円です。

会則・役員選定規定につきましてはホームページを参照下さい

日本がん転移学会研究奨励賞

<http://jamr.umin.ac.jp/research/index.html>

本賞はすぐれた研究業績を発表した本学会会員若干名に対して、
選考の上、本学会学術集会において授与する

- ・受賞候補業績の範囲は、原則として本学会において発表された業績として、
本学会会員により応募されたものとする。
- ・受賞候補業績は、将来の発展が期待される若手研究者(応募年度の4月1日現在
43歳以下)によるものとする。
- ・研究奨励賞受賞者数は単年度2名程度を原則とする。
- ・研究奨励賞の賞金(奨励研究費)は1件20万円とする。

両賞の募集期間：毎年 4月1日～9月30日

募集要項・申請書等については、事務局までメールでお問い合わせください

◆事務局◆ E-mail : jamr2021-office@umin.ac.jp

日本がん転移学会女性研究者がん転移研究グラント賞

<http://jamr.umin.ac.jp/research/05.html>

本賞はがん転移研究の将来の担い手を目指す女性研究者の
キャリアアップを支援することを目的とする。

本賞は日本がん転移学会田中紀子功労会員より寄贈され、
賞状ならびに賞金(研究費)をもってこれにあてる。

- ・応募時点で日本がん転移学会会員であり、助成対象期間中も会員であること
- ・助成対象期間中にがん転移研究に従事する女性研究者であること
- ・女性研究者がん転移研究グラント賞受賞者数は毎年1名程度を原則とする
- ・女性研究者がん転移研究グラント賞の賞金は合計50万円までとする

事務局から

毎年応募者が少ないのでチャンスです！奮ってご応募ください。

日本がん転移学会役員

理事長：土岐 祐一郎
会長：山本 浩文（第34回）
副会長：二口 充
前会長：吉治 仁志
理事：園下 将大

監事：海野 倫明
評議員：青木 正博
泉 浩二
稲田 全規
江口 英利
沖 英次
加藤 靖正
川田 学
北川 雄光
国安 弘基
越川 直彦
坂本 毅治
高野 重紹
滝野 隆久
田中 晃司
長野 一也
野田 剛広
樋田 京子
星野 大輔
宮田 博志
安田 卓司
山本 博幸
渡 公佑

瀧口 修司
三森 功士
大鵬薬品工業(株)
足立 靖
板野 直樹
井上 正宏
大島 正伸
尾崎 充彦
加藤 幸成
神田 光郎
北台 靖彦
隈元 謙介
狛 雄一朗
佐藤 慎哉
高橋 剛
竹内 裕也
田中 美和
永野 浩昭
浜田 淳一
藤田 直也
増田 慎三
望月 早月
安本 和生
山本 真義

早川 芳弘
エーザイ(株)
有明 恭平
伊藤 和幸
猪原 秀典
大塚 英郎
掛地 吉弘
亀井 尚
菊池 寛利
北山 丈二
五井 孝憲
堺 隆一
清水 史郎
高橋 秀典
竹田 和由
中 紀文
中山 淳
東 伸昭
藤原 俊義
松尾 洋一
森 誠司
矢野 聖二
由井 理洋

福島 剛
石井 秀始
伊藤 心二
上原 久典
岡田 太
鍛冶 孝祐
唐澤 秀明
北川 透
口丸 高弘
小泉 桂一
坂本 修一
下田 将之
高橋 広城
谷口 博昭
中川 圭
西岡 安彦
筆宝 義隆
藤原 義之
水間 正道
八代 正和
山口 英樹
横山 省三
(アイウエオ順)

事務局幹事：大植 雅之

評議員任期：2024年6月29日～2027年/第36回総会まで（第34-36回）

評議員年会費：10,000円

日本がん転移学会 名誉会員・功労会員

名誉会員：愛甲 孝
小林 博
清水 英次
田原 榮一
安井 弥

入村 達郎
今野 弘之
清木 元治
夏越 祥次
横田 淳

太田 哲生
済木 育夫
曾根 三郎
新津 洋司郎
渡辺 寛

高後 裕
佐藤 博
谷口 俊一郎
宮坂 昌之

功労会員：伊藤 壽記
垣添 忠生
桑野 信彦
高橋 俊雄
茶山 一彰
中山 淳
松浦 成昭
森 正樹

伊東 文生
片岡 寛章
小林 浩
竹之下 誠一
寺田 雅昭
西村 行生
宮城 妙子
矢野 雅彦

岡田 保典
神奈木 怜児
佐治 重豊
竜田 正晴
中津川 重一
宝来 威
宮崎 香
矢守 隆夫

小野 真弓
久保田 俊一郎
清水 暁
田中 紀子
中森 正二
細川 真澄男
向田 直史
渡邊 昌彦

日本がん転移学会 物故役員

物故顧問：菅野 晴夫
物故名誉会員：佐藤 春郎
鶴尾 隆
門田 守人
物故功労会員：東 市郎
久保田 哲朗

杉村 隆
末舛 恵一
螺良 英郎
Isaiah J. Fidler
阿部 薫
豊島 久真男

明渡 均
田中 健蔵
中村 久也
尾形 悦郎
馬場 正三

塚越 茂
磨伊 正義
北島 政樹
武藤 徹一郎

日本がん転移学会事務局 宛
Fax : 06-6945-0355

日本がん転移学会連絡用紙

日本がん転移学会会員の種々の変更・退会等の連絡はこの用紙をご利用ください。
会員番号(郵便物の宛名ラベルに印刷してある貴氏名の右下の数字)、並びにご氏名(フリガナ)を明記の上、
変更したい事項をご記入いただき、封書またはFax、E-mailにてご連絡ください。

年 月 日

住所等変更 ・ 退会 届

(上記、どちらかを○で囲んでください)

(フリガナ)		会員番号	
氏 名		生年月日	
勤 務 先	勤務先名称(部所属も記入してください)		
	〒		
	Tel		Fax
	E-mail		
自 宅	〒		
	Tel		Fax
	E-mail		
	雑誌等送付先を○で囲んでください。 勤務先 ・ 自宅		
変更年月日 西暦 年 月 日 付で変更します			
退 会 届 西暦 年 月 日 付でもって退会します			
その他			

※個人情報について

会員への連絡、会誌等の発送等、学会活動の目的に限定して利用します。

=====

[発行・編集]

日本がん転移学会事務局

Tel/Fax 06-6945-0355 (直通)

E-mail : jamr2021-office@umin.ac.jp

〒541-8567

大阪府中央区大手前3丁目1番69号

大阪国際がんセンター・研究所内

=====

2024.9